

二〇二〇年度 置賜地区 高校生

「地域と私たちの未来を考える」 第三回 小論文コンテスト

# 優秀小論文集

二〇二〇テーマ 「郷土の未来と私の生き方を考える」

## はじめに

私たちの住む置賜地域は人口が次第に減少していき、このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二年後に進学・就職を迎える高校二年生にとつては、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。

このような趣旨から「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』第三回小論文コンテスト」を高校二年生を対象に実施いたしました。応募された生徒の皆さん、そしてご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。今年はコロナ禍の影響で夏休みも短縮され、応募者減が心配されましたが、応募総数は二二三点とこれまでで最も多く、大変喜んでおります。小論文を読みますと、資料編を活用し自分の体験や知見を基にして、郷土の未来や自分の生き方を個性豊かに表現し、趣旨に沿った小論文を書いてくれました。高校二年生の今、この小論文に取り組んだ経験はこれから先必ずどこかで役立つものと思います。

この小冊子は、審査の結果、受賞された最優秀賞一点、優秀賞四点、入選五点を収録したものです。広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思えます。

令和二年十月二十五日

公益社団法人 米沢有為会 高校生小論文コンテスト実行委員会

# 目次

はじめに	1
◇最優秀賞	3
山形県立小国高等学校	二年 保科 奈緒
◇優秀賞	4
学園都市推進協議会会長賞	二年 星 麟太郎
米沢商工会議所会頭賞	二年 佐藤 萌
米沢・置賜経済人クラブ会長賞	二年 二瓶 菜津子
米沢信用金庫理事長賞	二年 山口 藍果
◇人選	9
山形県立米沢興讓館高等学校	二年 山 藍果
山形県立米沢興讓館高等学校	二年 後藤 優奈
米沢中央高等学校	二年 遠藤 綾乃
山形県立米沢東高等学校	二年 市川 萌音
山形県立米沢東高等学校	二年 高橋 風夏
山形県立米沢東高等学校	二年 奥山 さくら
審査講評	18
募集要項	19
資料編	20

## 小国町と私の未来

山形県立小国高等学校 二年

保科奈緒

中学生の頃の私の夢は、高校卒業後、早くこの町を出て行くこと。まさに、資料2の県外転出者の一人になることだった。また、資料1からは自治体消滅の可能性が示唆されている。最も可能性が高いのは小国町だ。当時の私は、小国町の少子高齢化の問題は、全くの他人事で関心が無かった。

しかし、今の夢は、この小国町で若者が盛り上がれる野外フェス（フェスティバル）を復活させて地域を活性化すること。真逆だ。私が激変した理由は何か。そこに活性化の糸口があるはずだ。

野外フェスを初めて知ったのは、小学校一年生の時だ。自然豊かな峠の広場で、音楽と飲食と交流を満喫するこのイベント。私は、親戚に駆り出されて渋々行った。し

かし、そこで衝撃を受けた。町外・県外・海外から来た人・人・人。大人たちから次々と話しかけられる。私は、話すのが苦手だったはずだが、フェスが終了した頃には、このイベントに魅了されていた。特に人と関わる楽しさと大切さを強く感じた。小国町は最高だと思った。

それが、いつの間にか、「人・地域・自然」よりも「覚えること」「町外に出ること」が私の中で重要になった。中学三年の時に、野外フェスがなくなると聞いても、残念だな、でも自分には何もできないな、としか思わなかった。

これが、大きく変化したのは、小国高校の「白い森末来探究学」がきっかけだ。授業時間だけでは足りず、課外でもフェスの運営者に話を聞いてみた。また、小国町はおもしろい町なのに、なぜ町外に出て行くのか、調査した。そこで出た課題がいくつかあった。解決の鍵は「若者が楽しめること」なのではないか。そう考えた私は、小国町の人も都会の人も楽しめる野外フェスを復活したいと思った。

しかし、高校生の私一人では、実現するのは困難だ。だから、大人に私の夢を話してみた。そしたら、たくさんの人が賛同し、協力を約束してくれた。不安が強い希

## 優秀賞

学園都市推進協議会会長賞

### 私と地域の将来をより良くするために

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

星<sup>ほし</sup>

麟太郎<sup>りんたろう</sup>

望に変わった。「地域みらい留学365」のオンラインフェスタで、このことを発表したところ、参加してくれた高校生からも共感を得られた。嬉しかった。この経験から、地域活性化のためには、自分の夢を地域の大人と実現できる環境や、オンラインで全国の高校生と繋がる必要があると考えた。オンラインと直接対面を併用するのだ。その環境は、誰かが創り出すものではない。自分自身が行動して創り出すものだ。

今年、感染症流行の影響で、研修旅行の中止も懸念された。しかし、熊本県立小国高校との交流が実現しそうだと聞いた。九月中旬には、オンラインで交流が始まると言う。お互いの地域探究について、刺激し合えるのが今から楽しみだ。

このコロナ禍において、小国町は、高齢者を守るため、若者の感染予防の意識は高かったと思う。高齢者を大切にできる小国町をますます好きになった。繋がりを大切にする小国町で、イベントを復活させ、みんなの笑顔を見て、私も幸せに生きていきたい。

徐々に人口が減少する置賜地区。分析によると、二〇四五年の人口は二〇一五年と比較して三十八パーセントも減少するということだ。このまま人口減少が進めば置賜地区の市町が単独で残れなくなってしまうかもしれない。私達の地元を守り抜くために何ができるだろうか。

資料から、高校卒業者の約五割が進学就職のために県外に出ていくこと、若年層の県外転出者数が人口減少の大きな要因になっていることが分かる。都市部と比較すると、大学も就職先も非常に少ないこの土地に住む高校生が、県外へ行きたいと考えることは、もつともな考え方であると思う。「田舎に居ても、進学先も就職先も無い」

と。しかし私は、進学等で都市部で学んだこと、実際に都市部で生活して得た経験や考え方を基に、地元で新しい企業を立ち上げたり、教師としてさらなる未来を担う子供達を育てたりすることなど、自分の得たものを地元で活かしていくことが、人口減少に歯止めをかけることにつながると思う。

私は中学校二年生の時に職場体験をした。自分が思っていた以上に、米沢には多くの就職先があるということに気づいた。置賜地区に就職先がないわけではないのだ。職場体験終了後、自分達の体験を発表する機会があり、多くの人から「とても温かく接していただけた」、「米沢のために少し貢献できたように思う」などの感想が挙がった。私は職場体験を行ったり、産業や企業の説明会を開いて、置賜地区にはどれくらい就職先があるのか、地域に残って仕事をする利点などを多く紹介して自分の住む地域への関心を高めてもらったり、地元で就職することの不安を払拭してもらうことがとても大事であると思う。また、私たち若者自身も積極的に地域を知ろうと関心を持つことも大切だ。

私は将来、県外の大学に進学し、卒業後教師として米沢に戻ろうと思っている。県外での暮らしを経験したか

らこそ気づく地元の良さが必ずあると思う。私は、教師として勉強だけでなく、そのようなことも伝えられるようになりたい。しかし、自分の将来のために県外へ進学、就職することは仕方のないことだ。このようなことも考慮して、地元就職を一つの選択肢にしてもらえようように郷土愛を育んだり、地域の現状を確認して関心を深める学習展開や実際に地元に戻り就職している方々に、地元就職の良さを聞く機会を設けるなど、教育現場から若者に地域貢献をアプローチしていきたい。

私はこの文章を書くまで、地元について深く考えることが無かった。少子高齢化の影響で人口減少が進んでいることに気づいてはいたが、具体的な減少数値は分かっていたしなかった。私は、今まで県外の大学に進学して県外で教師になろうと考えていたが、県内で教鞭を執るという新しい考えを持つことができた。地方消滅に歯止めをかける、人口減少を食い止めるために、私たち一人一人ができることは非常に小さなことであると思う。しかし、地元を守る意識を多くの若者が持てば、地元を守ることでできる可能性は大きくなる。自分と地元の将来の両方をより良いものにするのは容易なことではないが、小さな一歩でも少しずつ地元へ貢献していきたい。

## 郷土の未来と私の生き方を考える

山形県立米沢東高等学校 二年

佐藤 萌

私は今、将来看護師になるべく日々勉強に励んでいる。私の住む置賜地方は少子高齢化の影響により、労働人口が減る一方で医療を必要とする高齢者が増えている状況である。故郷の先の見えない状況に危機感や不安を持ち始めた今、将来少しでも地元貢献するためにはどう行動すべきなのかを考えることにした。

現在、県外へ流出する若者の割合は五十%以上と高くなっている。流出する主な理由は、今の山形県では学ぶことができないシステムや環境が県外に充実しているためである。この先の日本の将来を担う若者が先進的な技術や知識を学ぶために県外に出ていくのだ。しかし、この状況はデメリットだけではない。県外には学ぶ環境が多く整っているからこそ、県外で学んだことを地元持ち帰ってきてもらい地域を活性化させるチャンスになると思う。だからこそ、これから力を入れ取り組むべきな

のは、子育て支援の拡充、交通の整備を進め、県外へ進学・就職した人たちが帰って来たい、住み続けたいと思える街づくりを行うことだ。

また、少子高齢化が進む山形県を充実した環境にしていくには、教育や医療など様々な活動を支援していく必要がある。例えば、私たちに一番深く関わる教育では、授業の一環で地元の良さや特徴、歴史を学ぶ機会を設けて郷土愛を強めて意識してもらおう活動をする。幼い頃から慣れ親しんだ故郷だからこそ、良さを十分に理解してもらおうことで地元を大切にしたいと思う心を養うことが可能になると思う。他にも、医療は山形県にとって、避けては通れない分野である。少子高齢化の問題によって看護や介護を必要とする人口も増加していくと考えられる。また、最近流行している新型コロナウイルスなどの感染症の点から考えても医療体制について、しっかりと対策を取らなければいけないと思う。具体的には、医療従事者の人数を増やして個人の負担を軽減させたり、全ての地域で子供の医療費を免除して子育てしやすい、早期治療しやすい環境を作っていくことが必要だと思う。高齢者にはかり目を向けるのではなく、地元に残った若者への支援についても忘れてはならない。充実した環境

にするには、そこに住む全ての人が住みやすい街にすることが大切だ。

私はこれからの山形県に必ず必要になる「医療」の分野に携わる看護師として、また山形県の未来を担う若者として、今ある山形の良さと課題を自分なりに考えながら生活していきたい。そして、自分の考えを心に留めておくのではなく、周りの人や他の地域の人と互いに話し合い、また時には、自分なりにアクションを起こしてみたいと思う。少子高齢化、若者の県外流出はすべて悪として認識してしまうのではなく、山形県としての課題を見直す機会だと前向きに捉え、山形県のさらなる発展につなげていけるよう他人事と思わず県民全体の問題として取り組んでいきたい。また、私自身は県外・県内どちらに進学しても、身に付けたスキルを大好きな地元で発揮できるように精一杯勉学に励んでいきたい。



米沢・置賜経済人クラブ会長賞

## 地方創生で拓くふるさと未来

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

二に瓶<sup>へい</sup>菜津子<sup>なつこ</sup>

年々日本では出生率が減少しており、少子高齢化が問題となっている。また、地方では、若者の流出が続き、人口減少に拍車を掛けている。この置賜地区も例外ではない。資料から、二〇一八年の山形県における十八〜二十四歳の転出超過は二六九八人であり、全体の転出超過の約八割を占めていることがわかる。この現状に歯止めを掛け、私たちの地域を守っていくにはどうすれば良いのだろうか。

私は、まず地域振興による雇用の充実に着目した。米沢興譲館高校では一年時からそれぞれ興味のある分野の研究活動を行っていて、私は米沢の観光の現状や魅力を考える活動をしている。この活動を通して、米沢市は食を中心とした特産品、上杉神社など歴史的な観光地やイベントが多いことを知った。しかし、それを活用した店

などはあまり知られていない。住んでいる私たちですら調べてみて初めて知ったものも多い。また、駅から観光地までの交通が不便で、観光スポット同士の間の距離も離れているため、観光客が足を運びづらくなっているのではないかと推測した。そこで、まず宣伝に力を入れて米沢の魅力を広める。そしてイベント期間中にバスの増発、タクシーやレンタカーなどの思いきった割引を行い、交通機関を充実させて交流人口を増やしていくことが課題解決への一歩になると考えた。観光業や特産品に関わる産業における雇用の拡大につながり、若い力を得て企業活動が活発になり、新たな集客スポット、イベントなど観光事業に着手しやすくなるなどの好サイクルが生まれるのではないだろうか。

次に、進学・就職による若者の流出に着目した。現在、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえてオンライン授業が行われる大学が多い。これを活用し、地方の学生が自分の地域にいたまま都会などの学びたい大学の講義を受けられるようにすべきだと考えた。もちろん、大学内での研究を行う人が多いので、それぞれの学生のニーズへの対応が必要となる。同時に、地方と都市部の大学、企業の連携を強化させることも、課題解決に効果的であ

る。また、働き方の観点でも、便利だが通勤などの弊害を抱える都会に対し、地方ならではの豊かさをアピールすることで若者のUターンの促進が期待できる。このようにして東京など都市部への若者流入・人口集中を防ぎながら、多くを学び、かつ地域密着型の活動も行いやすくなる。その結果、将来的に地域で働く人材確保につながるのではと考えた。

若者流出を避けることは、高齢化が進む地域社会の大きな支えとなり、「地方消滅」の抑止に貢献するはずだ。私たちがすべきことは、まず、既にある道をただ歩むのではなく、自分たちの手で切り拓いて創っていくという志を持つことだ。一人ひとりが自分の地域の魅力や課題を知ろうとし、できることは何かを考えなければならぬ。また、地域のボランティアや行事に積極的に参加し、学校などの枠を越えて若者で地域を盛り上げようとすることも大切だ。この置賜が将来も永久的に誇れる場所であり続けるために、私たちがから行動を起こしていこう。未来は少しずつでも変えていける。

米沢信用金庫理事長賞

## 郷土の未来と私の生き方を考える

米沢中央高等学校 二年

山<sup>やま</sup>口<sup>ぐち</sup>藍<sup>あゐ</sup>果<sup>か</sup>

少子高齢化に伴って私たちが住む地域も人口が減ってきている。その要因の一つに若者の流出があげられているが、若者の県外への進学などは止める術がなく、制限されるものではない。そのため、若者のUターンを促すような取り組みに力を入れるべきである。

資料3を見ると、県外への進学者数が圧倒的に多く、半分以上の割合を占めていることが分かる。私の周りにも県外への進学を考えている人は多いと思う。地元の大学では取得できない資格を取ることができたり、より多くの人と関わることで経験や知識を得ることを考えると、自分の将来へのメリットがいくつもあると感じる。だからこそ、それらを身につけた上で、知識や経験を地元発信して生かしていくことが技術や産業の発展につながり、地域全体の活性化を実現させることができる。

考える。

現状として若者の回帰率が低下している理由を考えると、半ば一方的に都会の生活が楽しく魅力的だと考えてしまう人は多いだろう。そこで、若者に地元で働きたいと思ってもらえるような取り組みを考える必要がある。

例えば、地元にはどんな仕事があるのかを知ってもらうことが重要だ。地元でも意外と知られていない仕事がある。その仕事の明確な情報、仕事での自分の役割ややりがい、どのようにして社会に貢献しているのかなどを伝えることで、地元の仕事についての具体的なイメージや興味をもってもらえると思う。

次に、地元企業や仕事と関わりを持つことだ。職業体験などを通して企業、仕事と接点を持つことで職業の視野が広がるため、より多くの企業、仕事に魅力を感じてもらえると考える。私も学校で行われた「ワクワクワーク」という職業体験の場を通して様々な職業について実際に作業してみたり、仕事の内容を聞いたりして初めて知ったことがたくさんあった。自分が知らなかった職業を体験することで、選択の幅が広がりとても良い経験をする事ができたと思う。また、地元企業の方々が講師として来て交流することでさらに地域間のつながりが

深まり、初めて見る県外の職場よりも安心感があり、なじみやすい環境を作ることができると思う。

資料5にあるように、現在山形県で行われている若者の定着、回帰に向けた取り組みの中には、山形県と首都圏大学とのUIターン就職促進協定があることを知り、このような取り組みがあることも視野に入れて考えていきたいと思う。特に就職活動時の交通費支援や住居費補助などが充実していくと、興味を持つてもらえるはずだ。もっと多くの人に様々な制度があることを知ってもらいたいと思う。

私は将来地元に戻り、働きたいと考えている。自然が多く、支え合って生活し、優しさで温かさが溢れる人々が山形県の魅力だと感じる。お互いに知らない人々でも、道ですれちがったら自然と「おはようございます」や「おかえり」、「ただいま」といった挨拶が交わされるような和やかな雰囲気がとても好きだ。そんな地元をこれからも守り続けるために自分に何ができるかを考え、今も将来も地域に貢献できるように生活していきたい。

## 入 選

### 地域と私たちの未来を考える

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

後 藤 優 奈  
こ とう ゆう な

最近、ニュースなどで「少子高齢化」や「人口減少」という言葉をよく聞くようになった。私たちが住む置賜地区もそのような問題に直面している地域の一つである。特に高校を卒業し、大学進学や就職で県外に出ていく若者が多くなっていることが大きな要因である。このままでは置賜地区の二〇四五年の人口が二〇一五年と比較して三十八パーセント減少し、地域を支える人材や働き手が不足したり、伝統を受け継ぐことが困難になり地域が衰退していき「地方消滅」することさえ考えられる。

この問題を解決するためには、自分の住む地域の良さを再発見してもらい、高校・大学卒業後に地元に戻り就職したいと思えるような町づくりが必要だと思う。私は高校卒業後、教育系の仕事に就きたいと考えていて、自分の研究したい分野がある県外の大学に進学しようと思

っている。大学卒業後も多くの企業があり、毎日刺激を受けられる都会で生活をしたという気持ちがあった。しかし、現在は大学卒業後また山形県に戻ってきて県内で就職したいという思いが強くなった。そう思ったきっかけは昨年、米沢でフリースクールや就労支援という言葉を目にしたことはあったけれども、人口が多い都市にあるのだと思っていて、このような仕事をしたかったら仙台などに行くのが良いと思っていた。しかし、米沢でも同じような活動を行っている団体があり、地元にも夢をかなえられる場所があると知って嬉しかった。この講話は私にとって山形でも自分のチャレンジしたいことができる場所を見つける機会になった。各高校で行っている職場見学・体験など地元企業や団体の紹介をさらに増やすことで、地元には様々な企業があることを再認識できると思う。そして働き手の確保につながっていくと思う。

また、県内に戻ろうと思った理由がもう一つあり、地域の人のつながりや交流を大切にしたいと思ったからだ。小学生の時、地域の方と一緒に料理を作ったり、民話を聞かせてくださったりと、地域の伝統をたくさん教えていただいた。登下校中も「いってらっしゃい」「おかえり」と声をかけていただき、私たちのことをいつも

見守ってくださいました。このような体験ができるのも置賜ならではの、人とのつながりは心を温かくするものだった。次は私たちが恩返しをする番だと思い、生まれ育ったこの地域で働き、多くの人を支えていきたいという気持ちになった。

実際に住んでいても分からなかったことや、気づくことができなかった発見が多くあった。地元の企業や置賜地区の魅力を発信することで若者にアピールすることができ、UターンやIターン就職の促進になると考えられる。これから、どうすれば地域貢献ができるか、住みたいと思える環境とはどんなものなのかについて、同世代の人と考えを共有し合ったりしてこの地域への理解を深めていきたい。



## 私にできる恩返し

米沢中央高等学校 二年

遠藤綾乃

私は小学校の教師になることが夢だ。今回米沢の現状を学び、自分に何ができるのか改めて考えてみた。私は先生方から勉強以外にも様々なことを学んだ。先生が何気なく教えてくれた話の中に、強く興味を持ち、感動し、学ぶきっかけとなることもあった。米沢は歴史や伝統に溢れている。そこで、米沢の魅力を伝える役割を担いたいと考えた。

以前、笹野一刀彫の工房を訪問したことがある。そこには、一度はそれぞれ別の道に進みながらも、米沢らしいもので何かしたいと集まった三名の職人がいた。職人の高齢化で技術を受け継がなくては笹野一刀彫が途絶えてしまうという強い思いで集まったそうだ。米沢から出て、外から客観的に地元を見つめることで、米沢の魅力に気づくこともあるのかもしれない。彼らは、日々修行を重ねながら、実演販売を行うなどの新しい発想で伝統工芸を守っている。私は米沢に生まれ育ち、笹野一刀彫

が米沢にあることが当たり前だと思っていた。しかし、それは単なる当たり前ではなく、この伝統を長い間信念を持って受け継いできたからこそその当たり前であると気づいた。そのような当たり前を作っている彼らに、私は感銘を受けた。

また、米沢の伝統として長い間受け継がれているものに米織もある。中学三年生の時の学年行事で、合格祈願のお守りを米織で作った。少しでも若い人に米織に触れ、肌で感じてもらいたいとのご厚意で、自分だけのお守りを作る事が出来た。米織は知っていたが、実際に手にするのは初めてで、とても貴重な体験となった。時代や環境に合わせて奮励している様子を見て、この先も受け継がれていくべきだと思った。

米沢は古墳や遺跡、寺院や神社も数多い。何と云っても米沢と言えば上杉で、全国的にも有名である。歴史が大好きな私は、米沢の歴史に誇りを持っている。このような米沢に住み、歴史に触れる機会がたくさんあることに幸せを感じている。また、多くの人に知ってもらいたいと思っている。

もちろん、私の知らない歴史や伝統がまだまだたくさんあるだろう。生まれ育った米沢の魅力をもっと知るこ

とで、今以上に米沢への関心が深まるだろう。自分で調べたり、地元の人や親、祖父母の話を開いたりして、積極的に歴史や伝統に触れる機会を作り、発信していきたい。

私が先生になった時には、これまで学んだ米沢の魅力を伝えていきたい。温故知新の精神を大事にして、伝統を守り、新しい発想で継承していくことや、古き良き歴史を多くの人に知ってもらうことが、私の役割だと考えている。私が先生から多くを学んだように、学ぶきつかけづくりが大事なのではないか。また、この先生の話を開きたい、面白いと思ってもらえるような人になれるよう、伝道者としての技術も高めたい。そのようにしてぶれない信念を持ち発信することで、米沢に少しでも興味を持ち、住みたい、行きたいと思ってもらえるかもしれない。米沢を離れ県外に就職することになっても、米沢の魅力をあらためて再確認し、米沢に帰りたいと思うかもしれない。まず米沢を知り、魅力を伝えていくことが、活気や活性化につながるのではないかと。

## 郷土の未来と私の生き方を考える

山形県立米沢東高等学校 二年

市川 萌音

私が山形県外に出るのは年に数回ほど。県外から帰ってきて感じるのは、空気の綺麗さ、自然の豊かさ、安心感であるが、それは他を知らなくては感じることでできない部分である。もともと大自然に囲まれて育った私たちにとって今の山形の景色は見慣れてしまった、当たり前前の景色であり、魅力的に思えなかつたり、県外の方がキラキラ輝いて見えるのは仕方ないことだ。そして何より親に養っていただき実家から通える学校にしか通えなかつた学生が、実家から出て一人暮らしをしたいと思ったときや、自分の学びたい学問を見つけたときなどに、大学が比較的少なく、スーパーへ買い物に行くにも時間のかかる山形に残ることを選択することは少ないだろう。新しい物事が好きな若者にとって、緑に囲まれた景色や生活は少し味気なく感じてしまうのかもしれない。

そこで、私は資料2に目をつけた。転出者数より約

三千人少ないが、転入者は約一万五千人もいるのだ。最近では子供を自然豊かな所で育てたいと考えている人が増えてきている。だが、施設は充実しているのか、生活に不便ではないかと足踏み状態の家族が多い。その足踏み状態の家族の背中を一押しするような、子供を育てるにあたって嬉しい政策があればよいと感じた。子育て世代を金銭的に援助したり、子供を伸び伸び自然と触れ合いながら育てることができるような施設を作ったりなどだ。このような施設を作るうえでメリットはたくさんある。まずは県外から子育て世代の家族が集まることだ。初めて山形に来る人や子供の頃山形に住んでいた人が、自然が豊かだという本来の武器だけでなく、子育てに適した場所だということに魅力を感じて移住してくる可能性もある。そうやって子供が増え、小さい子を持つ親つまり働き手も増える。また、施設が増えることで雇用が増えるなどのメリットもある。若者が好む、住んでいたい街づくりよりも、若者がいつか戻りたい、また住みたいと感じる街づくりの方が山形には合っている。

ここまで私は自然を感じることでできる教育施設の充実について書いてきたが、私は実際にこれらを建築士という立場で実現させたいと思っている。山形の大きな武

器である豊かな自然に溶けこむような建物、季節によって姿を変える景色や空気を全身で感じられるような建物を作りたい。優しい風で身体を包み、美味しいお米などの食物で伸び伸びと育ててくれた大好きな山形に恩返しをしたい。このまま廃れていつかはもったいない素敵な文化や魅力がたくさんあるのだ。

冒頭に書いたように、山形県には他の都道府県を知ってからでないと感じけない、ずっと住んでいては見落しがちな良い所がたくさんある。また戻ってきて住みたいと思ってもらえるような街づくりをしていきたいし、二年后やはり山形県のために仕事をしたいと私自身が思えるように、山形県の魅力をもっと肌で感じていきたい。



## 郷土の未来と私の生き方を考える

山形県立米沢高等学校 二年

高<sup>たか</sup>橋<sup>はし</sup>風<sup>ふう</sup>夏<sup>か</sup>

若者流出が問題視され、地方の大幅な人口減少により地方消滅さえ懸念されるようになった今日、私達に出来ることは一体何なのか。

私は、都会の影響方に引張られて、故郷の魅力が個人の中で薄れてしまっていることが問題だと思う。都会は確かに魅力的だ。いつだって流行の最先端をいつているし、アイドルや俳優などの有名人を含めた、たくさんの人で溢れかえっている。正直、私もテレビやインターネットなどを通して、都会にとても魅了される時がある。しかし、同時に故郷であるこの山形県の温かいつながりを手放したくないとも思うのだ。空がとても澄んでいて広いことや、その空に山々が映えること、食べ物が美味しいこと、私のことを気にかけてくれる近所のおばあちゃんがいること、年齢に関係なく一緒にお茶をする人がいること、ずっと一緒に居たいと思える友達がいること。挙げ出したら切りがないくらいに、私はこの山形県でた

くさんの幸せを感じ、充実した生活を送っている。故郷から出て行くのは簡単だが、故郷の美しさや尊さは、そこで生まれ育った私達が一番よく知っていて、それを守れるのは私達自身なのだ。

それを踏まえて、私は地元で進学・就職する人を増やすことはもちろん、UターンやIターンなどで結果的に山形県に戻って来る人達を増やすことが重要だと思う。Uターンとは、故郷から都市へ進学や就職で移住した後、もう一度故郷に戻って来ることだ。Iターンとは、故郷から進学や就職で移住した後、故郷に近い地方都市に移住することだ。Iターンに関しては、山形県内に戻らないかも知れないが、少し離れた所から県を見つめ、都市の良い所と故郷の良い所のどちらも吸収し、故郷の発展を期待できるようなアイデアが生まれると思ったからだ。私は、県内では学べないことやできないことが都市でできるのなら、自分の可能性のために都市に行くべきだと思う。しかし、その習得した技術やスキルを自分がどんな形で活かしたいのかというビジョンをしっかり持つことが一番大切だと考える。「自分のため」に習得した技術やスキルが、「大好きな故郷のため」に役立つこととは大いにある。たまたま企画、デザインした県のPR

が功を奏し、故郷がさらに賑わうかも知れない。新しい技術を取り入れたものづくりを行うことにより、人々の注目を集められるかも知れない。それによって、都市から人々が移住するＩターンが増加するかも知れない。このように考えれば、全ての若者、大人、高齢者まで、無限の可能性が広がっているように感じられる。実際に山形県は、二十の首都圏大学とＵＩターン就職促進協定を結んでいるし、地元への人材確保、定着のために、大規模な就職説明会やビジネスマナー講座も行っている。

最終的にどこに住んで働くのかは個人の自由であり、私が決められることではない。しかし、自分と故郷は、切っても切れない存在であり、いつでも私達を優しく見守ってくれていたことは忘れてはいけないと思う。私も、自分がやりたいことと大好きな故郷のためにできることを照らし合わせて、将来の自分の生き方について考えていきたいと思う。



## 郷土の未来と私の生き方を考える

山形県立米沢東高等学校 二年

奥山 さくら

私は将来米沢に残りたいと思っている。私の山形県の理想は、一人でも多くの山形県民が地元に残ることだ。私はずっと米沢に住んでいて、米沢は自然豊かで災害が少なく、とても住みやすい地域だと思う。また、親切な人が多く、世代に関係なくたくさんの方が繋がりがあり、愛着を持っている。この米沢を未来に残したいと強く思う。しかし、今の米沢は様々な課題を抱えていて、町の衰退化が進行している現状にある。その一つに人口減少がある。資料1を見ると、米沢市は四万弱の人が減少すると予想されている。資料2からは、県外転入者に比べ県外転出者の数が非常に多くなっている現状にある。特に若年層の転出超過が多いことが分かり、米沢から若者がいなくなる可能性がある。このことから、将来の米沢市は高齢者の割合がさらに高くなることが予測される。資料3を見ると、高校卒業時に県外へ進学・就職する人が非常に多いことが分かる。そのために若者の転出

を止めるかUインターンを促すことが必要だと考える。現在山形県内では様々な取り組みが実施されている。例として、首都圏の大学と協定を結びUインターン就職促進や奨学金返還支援、各高校での職場見学やインターンシップの実施などの取り組みが行われている。しかし、それにもかかわらず、なぜ県外転出者が増加傾向にあるのか。若者にこの取り組みが把握されていないということもあるが、一番は地元の魅力がないと感じているからだ。

私がこう考える根拠として、希望職種がないことや、この地域に愛着を持たない人が多いことだと考える。私は中学生の頃、教育系の職場体験を実践した。体験したことで、働く、ことの大変さや達成感を味わうことができ、判断力や行動力などの欠点を見つけれられ、今後の生活で改善すべき所が多々発見できた。体験する前は将来の夢が定まっていなかったが、この機会により自分の将来を見つけることができ、地元で就職したいという夢を持つことができた。しかし日本では、自己肯定感の低さやキャリア教育の遅れにより、進路を主体的に選択する能力を育むことができなくなっているのだろう。具体例として、アメリカでは職業生活への移行を円滑に行うためのインターンシップが日本よりも普及している。実

際働くことで、社会人としてのマナーやモラルを体験でき、仕事への理解を深め、経験を積むことで自身の成長にも繋がる。インターンシップをより発展させ、自分の意思を確立し、地域と自分の未来を考えることが重要になってくる。また、近年情報社会になっている日本は、県内の情報を多くの若者に知ってもらうために、インターネットを活用して伝えるとよいのではないか。コロナウイルスの影響で自粛期間中、私は学校の情報を迅速に知ることができ、すべき内容を正確に確認することができた。インターネットを駆使して若者にアプローチすることも取り組みとして良いのではないか。私のこの経験から、学生時代に地域の人と触れ合うことで地元への愛着があり、地元の魅力に気づくことができるのではないかと考える。私は地元で働いて、米沢が未来に残るようになくさんの人と繋がり、地域の魅力を伝えられるような人材になりたい。



## 審査講評

第三回小論文コンテストに、多くの意欲的な小論文を寄せていただいたことを、大変に意義深く感じました。郷土の現状と未来における課題は多くその解決策を考えることは、とても難しいものです。その中でも、自分の体験や知見を土台として、資料編を参考にしながら地域活性化の取組や郷土の良さの自覚・発信、Uターンの促進等々、様々な事例・提案が述べられています。それと併せて、希望の職業を考えながら、この地域で貢献したいとか、一度県外に出て学んで戻ってくるなど、今の段階で辿り着いた自分なりの解決策を提示し、まだまだ練り上げなければならぬとしても、そこに至った思考は価値あるものと思います。

コンテストへの応募を契機に、地域が抱える問題状況について初めて知り、地域の未来や自らの生き方について初めて考えたと述べる小論文が多くありました。この応募を機に生じた問題意識の灯を消さずに、今後も何度となく繰り返し、どうすれば地域に貢献できるのか、住みたいと思える環境はどんなものか、考えてみて欲しいと思います。

審査を通して感じたことは、「如何に思いをきちんと伝えるか」を意識して書いているかどうか、その度合いによって論文の魅力や評価に大きな差が出てしまうということです。高校二年生がこのコンテストに取り組むこと自体が自分を磨く学習です。書き手の豊かな創造性にも関わらず、誤字・脱字、主語・述語の乱れなど、提出前に読み返す習慣があれば防げるものや、文字が薄く、また小さい文字で書かれて読みにくいものも見られ、他人が読むものと考えれば改善できるものも少なからずあったことを、念のため記録しておきます。

結びに、真摯に取り組んでいただいた応募者に敬意を表し、今後のご活躍ご精進をお祈りします。

# 置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

## 募集要項

### 一、趣 旨

少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二年後に進学・就職を迎える皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。本コンテストは高校生の皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願います。

「郷土の未来と私の生き方を考える」

### 二、対象者

### 三、募集小論文

置賜地区高等学校二年生  
募集要項の資料編を参考にして、テーマについての各自の考えを一二〇〇〜一四〇〇字にまとめてください。(使用鉛筆はHB又はB)

### 四、応募先

各高等学校の担当者まで  
各学校から主催者への提出締切 八月三十一日(月) 必着

### 五、表彰式

最優秀賞一点 優秀賞四点 入選五点 及び副賞

### 六、審査委員長

十月下旬の予定 ホテルモントビュー米沢(米沢市門東町)  
米沢有為会会長 大滝則忠 (元国立国会図書館長)

### 七、主催・共催

公益社団法人米沢有為会 学園都市推進協議会  
置賜総合開発協議会 置賜地区高等学校長会 米沢商工会議所 米沢・置賜経済人クラブ  
米沢新聞社 NCV 米沢信用金庫

### 八、後援・協賛

第3回小論文コンテスト 資料編  
2020年テーマ 「郷土の未来と私の生き方を考える」

はじめに、山形県及び置賜地区の人口の動きを、30年の長期的スパン（資料1）と、2018年時点（資料2）の二つの視点から見てみましょう。

資料1 山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口（10年毎）

西暦	2015	2025	2035	2045	人口変化率 2015～2045 (%)
山形県	1,123,891	1,015,910	897,075	768,490	<b>-31.6</b>
米沢市	85,953	77,483	67,817	57,720	<b>-32.8</b>
長井市	27,757	23,918	20,160	16,377	<b>-41.0</b>
南陽市	32,285	29,017	25,494	21,762	<b>-32.6</b>
高島町	23,882	21,131	18,214	15,115	<b>-36.7</b>
川西町	15,751	12,783	10,148	7,655	<b>-51.4</b>
小国町	7,868	6,059	4,517	3,220	<b>-59.0</b>
白鷹町	14,175	11,918	9,839	7,797	<b>-45.0</b>
飯豊町	7,304	5,956	4,755	3,620	<b>-50.4</b>
置 賜	<b>214,975</b>	<b>188,265</b>	<b>160,944</b>	<b>133,266</b>	<b>-38.0</b>

＜出典 国立社会保障・人口問題研究所＞

**置賜地区では、2045年の人口が2015年と比較して38.0%減少します。**

資料2 山形県の年齢別移動者の状況<2018年(平成30年)山形県の人口と世帯数から>

○表1 全年齢層の県外転入・転出者数 (人)

	県外転入[a]	県外転出[b]	転出超過[a-b]
2018年	14,763 (6)	18,018 (△215)	△3,255 (△221)

※ ( ) は対前年増減を表す。△表示はマイナス。

「県外転入」は県外からの転入を、「県外転出」は県外への転出を表している。

**2018年の本県の県外転入、転出状況は、3,255人の転出超過になっています。**

○表2 若年層の県外転入・転出者数 (人)

	県外転入	県外転出	転出超過
18歳	386	862	△476
19歳	587	1,060	△473
20歳	425	666	△241

21 歳	497	816	△319
22 歳	709	1,205	△496
23 歳	821	1,311	△490
24 歳	594	795	△201
計	4,019	6,715	△2,696

<出典 山形県統計企画課>

**18～24 歳の転出超過は 2,696 人となり、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因になっています。**

**資料 3 山形県の高校卒業者の県外への進学・就職状況** <出典 山形県統計企画課>

	卒業者数	大学等進学者数 (うち県外)	就職者数 (うち県外)	計 (うち県外)	県外の 割合
2018年度 (平成30年度)	9,943名	4,501名 (3,227名)	2,994名 (704名)	7,495名 (3,931名)	52.4%
2019年度 (令和元年度)	9,849名	4,390名 (3,038名)	2,933名 (648名)	7,323名 (3,686名)	50.3%

**高校卒業者のおよそ5割が進学・就職で県外に出ていきます。**

**人口減少の一因である「若者流出」の状況を統計データで見ましたが、これに歯止めをかけるさまざまな対策が講じられています。最後に、それらの取組を紹介しましょう。**

**資料 4 置賜圏域の将来像…行政施策「置賜定住自立圏共生ビジョン」の取組例**

置賜圏域は、歴史的背景や地理的要因から、行政区域を越えて生活圏を共有し、経済、教育、文化などの面で深いつながりを持ちながら発展してきた。これまで圏域内の各市町は、それぞれが活力ある地域づくりを実現するため、様々な取組をしてきたが、人口減少や高齢化は急速に進んでおり、今後もこうした傾向は続くものと予測される。この状況下で、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要である。こうした認識のもと、置賜3市5町は、それぞれの独自性を維持しながら、地域の魅力をしっかりと磨き、その上で様々な分野において連携を深めつつ、住民の暮らしに必要な諸機能を圏域全体として確保することで、住民が暮らしやすい、活力ある圏域を創造し、共生共栄を目指す取組を行う。それが「置賜定住自立圏」というもので、米沢市が「中心市」、2市5町が構成市町となり協定を締結し、共生ビジョンに基づいて連携事業を推進する。具体的な取組として①生活機能の強化（医療、福祉、教育、産業振興、環境、水道、消防・防災）、②結びつきやネットワークの強化（交通、移住・定住・交流）、③圏域マネジメント能力の強化（職員等の交流）の3つの政策分野で取組を行う。

<米沢市「広報よねざわ」2019.5.1より>

## 資料5 若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

### 事例1 山形県と首都圏大学とのUIターン就職促進協定 20大学と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

＜協定締結大学＞ 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国土館大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学、法政大学、千葉商科大学、神奈川工科大学

＜出典 山形県雇用対策課＞

### 事例2 山形県若者定着奨学金返還支援事業の実施

大学等へ在学の方又は進学予定の方を対象として、県と県内市町村が連携して、奨学金の返還を支援する事業。米沢有為会も市町村枠で実施。平成27年度から始まり今年度も継続。要件は日本学生支援機構の第一種奨学金（無利子）の貸与を受けている方又は受ける予定の方、米沢有為会の奨学生。大学等を卒業後6か月以内に、山形県内に居住かつ就業し、山形県内の助成対象分野に通算して3年間就業した後、申請し、助成対象者に認定された時点で返還金の一部の助成を受けることができる。

＜出典 山形県産業政策課＞

### 事例3 米沢三大学（山形大学工学部・米沢栄養大学・米沢女子短期大学）保護者対象の「米沢地域産業見学会」の実施

米沢商工会議所主催。保護者の方に米沢の産業・企業を知ってもらい、この地で生活する不安を払拭してもらうことによって、大学卒業後、地域に残り就職する選択を後押ししてもらうことを意図した企画。昨年度は17名参加。

### 事例4 各高等学校における多様な取組

各高等学校においては地域学習の展開、職場見学・体験、インターンシップの実施など郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

### 事例5 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関〔米沢市・南陽市・高畠町・川西町〕やハローワーク等との緊密な連携のもとに、若者の雇用安定を目指す団体）が、模擬面接会（高校3年生対象）や大規模な就職説明会（高校2年生420名参加、出展企業50社）、新規学卒者ビジネスマナー講習会や新入社員フォローアップセミナーなどの諸事業を実施。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。また、高校1年生を対象とした職業体験会の開催など、進学者を含め地元にいるうちに地元企業を知ってもらう事業についても展開している。（昨年度は2校計362名の高校生を対象に実施）

二〇二〇年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第三回小論文コンテスト

## 優秀小論文集

発行日 二〇二〇年十月二十五日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 大 滝 則 忠

〒八二〇〇四 東京都調布市入間町一―三六

東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三三〇九―三三三〇二

ホームページ: <http://www.yonezawa-yuika.org/>

二〇二〇年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第三回小論文コンテスト

## 優秀小論文集

発行日 二〇二〇年十月二十五日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 大 滝 則 忠

〒116-0004 東京都調布市人間町一―三六  
東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三三〇九―三三三〇二

ホームページ <http://www.yonezawa-yuukai.org/>